

どうしてここにいるのだろう

一昔もふた昔も前のことで記憶はあやふやだけれど「こどもなんでも相談室」といったか、電話で分からないことを尋ねると、専門家のおじさん達が何でも調べて答えてくれる番組があった。無論ラジオの話でテレビ番組のことではない。ひよっとしたら今でもあるのかもしれないが、ラジオを聴くことが殆どないので定かでない。

後年、そのおじさん達の一人が番組を回顧して解答者の苦勞を雑誌に書いているのを眼にする機会があつてえらく感銘し、未だに忘れられない話がある。残念ながらその時の放送を、私が直接聴いていたわけではない。お魚はいつどうやって寝るのですかとか郵便番号はどうやって決めるのですかという類のいつもの子供らしい質問がいろいろ来るなかである日、幼い声で

「アノネ、ボクハドーシテココニイルノデスカ？」

という質問があつて、おじさんは絶句したというのである。

まだ小学校に上がるか上がらないかという年齢で既に人生の深淵を覗き込んでいるようなこの疑問に、おじさんがどう答えたかは書いてなかった。自分だったらどう答えるだろうか、それを考えればおじさんの当惑はよく解るし、それだからよけいにごう答えたのか知りたいが、この際どうでもいいことにしよう。失礼だけれど、何をどうごまかしたかは想像がつく。どうせ誰にも答えられない、正解の無い大問題である。それよりも、人が生涯を賭けて答えを捜さなければならぬとてつもない難問を、まことに素直にフツと問いかける柔かい心に感動した。頭の良い子がいるものだ。

どう逆立ちしても自分は幼い頃にこんな哲学的な疑問は持てなかった。人並みに好奇心はあつた筈だけれど、関心の対象はもつと即物的だつたと思う。

生きる為にさしあたり順応すべき世界は常に自分の外に展開していて、内に大きな空洞を抱えてポツンと時空の一点に佇む自己を発見するのはもつと後のことだつたような気がする。子どもは子どもなりに忙しいのである。

しかし自分が何者であつて何故ここに存在しているのかに考えを廻らすことなどまるでなかつたかどうかといえ、実は忘れていただけで、それでもなかつたのかもしれない。自分の疑問と不安をはつきり把握出来るか、表現出来るか、またどれほど真剣に答えを求めているのかという違いはあるにしても、ヒトは生涯を通じていつも知りたいのではないだろうか、自分はどこから来てどこへ行くかとしてしているのかを。

今年正月四日、母が不意に三十九度を超す熱を出した。三が日、孫夫婦が来たり、客があつたりで、寝ている時間よりも座っている時間が普段よりも長かつたので疲れたらしい。自分で匙を口に運べなくなつて、カミサンに昼食を食べさせて貰いながら小刻みに震えは

じめ、風船の空気が抜けるように見ている間に蒼白くしぼんでしまった。具合が悪くなった時はいつもそうなのだが、さながら打ち倒されたように小さくなって息も絶え絶えになり、か細い声で呻吟し続けるのでいよいよこれが最後かと慌ててしまう。前日の一月三日が誕生日だったのでまさにほやほやではあるが満九十三歳である。永訣の覚悟を固めなければならぬトシであろう、けれどもちよつと待つて欲しい、それが今のイマというのは困ると、情けないかな、ついこちらの都合を考えてしまう。しかし、幸いにしてカミサンの連日徹夜の看病が功を奏して今度も三日目には解熱し、呼びかけると唸って返事をしてくれるようになった。まだまだ寿命があつたと見える。

カミサンのいうのに、意識が戻つて来たときに母が最初に発した問いは

「ココハドコデスカ、ワタシハドーシテココニオルンデスカ」
だつたという。

多分、熱にうなされているあいだ、過去と未来、この世とあの世を自在に往来していたのに、ふと気が付けば元の不自由な肉体に閉じ込められて万年床に転がされているのに合点がいかなくなつたのである。私は母が三日の間どこへ行つていて、誰と話し、何を見ていたのかを聞かせて貰いたかつたけれど、もともと寡黙な上に自分を表現するのが上手でない人だから、残念なことにそれ以上ヒントになる言葉は出てこない。

母はそれこそトシのせいで記憶力は衰え、ついさつき食べたばかりの食事を思い出すことは出来ないし、近年は古い記憶も薄れがちになつて来てはいたが自分を失つて呆けているのではない。認識の範囲は極度に狭くなつてはいるが歪んでもいないし、断層もない。そういつたいわば 正常に 衰弱してきた老人が、昏睡状態にあつた間に見失つた自己を取り戻そうとして、まず最初に「ワタシハドーシテココニオルンデスカ」と問うのはいかにも人間らしい。

母の場合、今まで夢の中で鮮やかに飛翔していた時空と、立ち戻つた現実との落差があまりにも大きかつたのか、あるいは両者の境界があまりにもぼんやりしていたからか、どちらにせよ自分が何処に居るが判らなくなつて、まずそれを確認したかつたのであろうから、それをもつてヒトは常に 生きている理由 を捜している証とするのはいささか無理かもしれない。しかし子どもであれ年寄りであれ、自分を意識し、自律しようとする時は、ヒトはまず自分の由来、存在理由を明らかにしたがるものだ。私は思う。そして、そのことがとても興味深い。

これこそ神がヒトに遺したメッセイジではないだろうか。

宇宙の一隅にかくも多様な生命形態が発生したことの意味は誰にも判つてないが、これは生命自身が明らかにするしかないのだというのが神のメッセイジであつて、このメッセイジをヒトに遺して 神は死んだ のだと私は考えている。